
ひとみをとじて

さすらいのかえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとみをとじて

【Nコード】

N8415L

【作者名】

さすらいのかえる

【あらすじ】

私、俺の好きな人は別の人が好きみたい。三角関係から始まる重ならない想いの行方は……。

*1話ごとに女の子視点、次は男の子視点と交互に変わりながら話が進みます。

その1

「なぎさっ 青木君で格好良くない？」

授業中、隣に座る、椿つばきが小声で言ってくる。私たちは、入学式の時に名前の順で席が近かった事から仲良くなった。私の名字が鹿島かしまで彼女が織笠おりかさという。

高校は別だが、2人とも女子校出身というのもあって話しやすい。だいたい同じ授業を選択していて一緒の事が多い、この一ヶ月で名前で呼び合うくらい仲良くなっていた。

「え？」

「あの前の方に座ってる人」

椿が遠慮がちに指をさしながら言った。男の子にしては小柄かな？ まあ、私の背が170以上あるから、そう思うのかもしれないが……多分同じくらいの身長かな？

椿は小さいから丁度良いのかも？ 顔は私の位置からは見えなかった。

「なに好きなの？」

「え、違うよ」

口ではそういつているけど、顔を少し赤くしている。凄く可愛いな。

私の心がズキリと痛む……嫉妬だ。

私は彼女の事が好きだった。

その2

俺は大学入学してから一ヶ月経ったが孤立していた。

何となく友達作りレース？ から外れていたのだ。

携帯電話を持ってないのも原因かもしれない、番号、メルアドを、交換しようとは何回か言われたが持つてないと言うとビックリされる。

まあ、そのうち出来るだろうと樂觀視しているけど……。

そんな俺なので、学食で4人掛けのテーブルを、1人で占拠してお昼を食べていた。

「すみません。ここ空いてます？」

俺はたんとんとカレーを食べる。トントんと肩を叩かれた。

「あのー空いてます？」

「俺に言ってたの？」

「そうですよ！」

ヤバイ！！ 最近声かけられる事なかったから無視してしまった。

話しかけてきた人を見てビックリする。

俺はさっき言った通り交友関係が無いに等しいが、自分で言っていて悲しくなるな…… あゝそれは置いといて、俺でも知っているちよつとした大学の有名人が立っていた。

まあ、違う意味でも知っているんだけど、それは置いておこう。

俺に声をかけてきた方が、女の子にしては結構背が高くて美人さんでモデルのような人、名前は鹿島さん。

もう一人が、男たちがアイドルの誰とかに似ているとか言って可愛いと評判の人、俺はテレビ見ないので、名前は知らなかった。

今、目の前に居る本人の名前も知らないです。すみません……ここで謝ってもしょうがないか……また話がズレたな。

この2人が仲が良いらしくよく並んで歩いている。それを見て目の保養になると、男たちの間で有名なのです。長い説明聞いてくれてどうも。

「え」と空いてますよ」

2人が俺の前に座ると弁当を取り出して食べ始めた。

「青木君カレー美味しい?」

アイドル似のふあふあさんが言ってきた。雰囲気がそんな感じなので勝手に命名。

「え! 何で名前知っているの?」

「え」と……」

何だか困っている? 何でだ。鹿島さんが助けるように言う。

「あゝ同じ授業あるでしょだから」

「そうそう」

何だか焦ってる感じがするのは気のせいかな？

「んー俺は2人の名前知らないから教えて」

まあ鹿島さんは知っているんだけど。

「私が鹿島渚で」
かしまなぎさ
おりかさつばき

「織笠椿です」

「じゃあ知ってるかもだけど俺も、青木隆です。よろしく」
あおきたかし

「よろしく」

「よろしくね」

その後、食事が終わったあと3人で話をした。午後の授業が同じだった事もあり3人で一緒に行動する。仲良くなったかも。

授業が終わり、家に帰る為、2人と別れようとした時に鹿島さんが言ってきた。

「今度から敬語で喋らなくていいよ、あと名前もさん付けしなくていいし」

「あ、私もいいから」

「わかった。じゃあ俺にも気を遣わなくていいよ」

「じゃあまた」

「また明日！」

「バイバイ」

1人帰りの道を歩きながら思う。

こんな切っ掛けで、好きな人と喋れるようになるとは思わなかつ

た。

その3

授業が終わり2人で学食へ歩いて行く、2人ともお弁当のただけど、座って食べるため席を探していたら……あ！ さっきの青木君？ が1人で座って何かを食べていた。

「ねえ、あそこ行かない？」

椿も見付けたようだ。はあく目がキラキラしてるよ。

「私に声かけるとか言っんでしょ」

そう私が返すと、椿は微笑みながら言った。

「あ、わかった？」

私はその顔に弱い、ため息を吐きながら言う。

「はあくわかりましたよ。行く」

「だから、なぎさ好き」

学食でなければ抱きしめていたかも……。

「すみません。ここ空いてますか？」

「……」

無視された！ こんな男のどこが良いだ！
チラリと後ろを見ると椿の期待した目が見えた。

ほんと男の体なんかに触りたくないのだけど、肩を叩いてもう一度言っ。

「あのー空いてます？」

「俺に言ってたの？」

「そうですよ！」

気付いてなかったのか……その後、椿の天然っぽい発言などあったが、自己紹介などしてから話をした。結構良いやつかな？

午後の授業が同じだったので昼休みが終わったあと3人で行動する。その間、椿がずーと楽しそうなのが嬉しいような悲しいような複雑な気分だった。

最後に、彼は終始、私たちに気を遣っている感じだったから、これからは気を遣わなくて良いと言って別れた。

帰り道を2人で歩いていると椿が言ってきた。

「なぎさ、今日はありがとう」

「いや、いいよ」

「話しやすい人だったね」

「あーそうだね」

私たちは女子校出身という事もあって、男子と話すのが苦手だった。私の場合はそれだけじゃないのだけど……。

椿が不安そうに言う。

「好きになったらダメだよ」

「わかってるって」

好きになるはずがない、私はあんたが好きなんだよ……せつないな……。

私は……どうしたらいいのだろうか？

その4

最近、俺は例の2人と一緒に行動している。

2人と仲良くなつて気付いた事だが、ほとんどの授業を同じものを取っているのだ。どっちか1人と同じ事もある。

織笠が同じときは、2人で並んで座つて授業を聴く、他の男子の視線が痛かったりする。織笠は2人だとあまり喋らない。

あと、俺と同じで友達もあまり居ないようだ。授業中に友達が少ないという話で盛り上がったことがあった……何かダメダメな会話だけど……。

鹿島が同じときは、彼女は他の女の友達と座っている……という事で授業中はバラバラに座る。鹿島は女友達が多いし人望がある頼れるお姉さんって感じかな。

授業が終わると俺と合流して、織笠を迎えに行くのが定番で、そして織笠が寂しかったと鹿島に泣きつくのがお決まりの光景だ。

3人が同じときはというと、織笠が真ん中で俺と鹿島が両脇に座る。

3人のときは、織笠はよく喋る、ほとんど1人で喋っている感じだ。なのに、テストなどをやると織笠が一番いい点を取るなぜ？ あれで授業聞いているのか？

これでわかるように、3人で行動するようになったのに俺は鹿島と話をほとんどしてない、前から気付いている事だけど、鹿島は男が苦手みたいだ。

だから3人の時に一緒に居られるのは凄いなと思う。でも、何か寂しいと感じた……鹿島の目が違う所を向いているのも知ってい

る……けど俺は2人でいるときも話をしてみたかった。

……ただ好きだから。

その5

私たちは3人で行動する事が多くなって、彼はすっかり私たちの中に馴染んだ。

私は彼と話していても平気な事に自分でビクリしていた。でも、2人つきりにはなりたくない、彼は私が欲しいものを持っているし、上手く言えないけど人を安心させる雰囲気があつて、2人で話したら何もかも言つてしまいそうで怖かった。

私の椿への想いは誰にも知られたくない。

たまに椿が私と彼が2人一緒の授業のときは何を話しているの？とか聞いてくるのだけど、私は変にごまかして曖昧な事を言ってしまう……正直に別々に座っているとえばいいんだけど……。

椿と2人つきりで行動していたときが懐かしい、2人に戻りたいとたまに思うけど、今の3人の関係は凄く好きだ。壊したくない、私が我慢すればいいのだろう。

私は自分の部屋で物思いに耽つて、そんなことを考えていたら家のチャイムが鳴った。

今日は珍しく家に私1人……めんどくさいな〜と思いつつ部屋から出て玄関に向かい、玄関のドアを開けると椿が立っていた……ちよつと様子が変わかも？

「どうしたの？」

「……」

「家にくるの珍しくない？」

「……」

玄関に立って何も言わない椿を強引に私の部屋に通して、私は黙って何か言うのを待つ事にする。

少し時間が経つと、椿が話したした。

「なぎざ〜隆君私の事どう思ってるかな」

椿はちよつと前から青木の事を隆君と呼び始めていた。彼女がそう言つたたびに私は嫉妬している……バカみたいだ私。

「嫌いではないと思うけど」

椿が笑顔で答える。

「だよね」

何でそんなに嬉しそうに言うの……。

「私、好きなんだ」

「……そっか、うまくいくと良いね」

「ありがとう。でも告白する気はないよ」

「そうなんだ。言えばうまくいくと思うけど」

口では調子いい事言つて、心の中では椿がふられる事を祈ってる私が出た。なんで、こんな考えをしてしまうんだろ……自分が嫌になる。

「まだ勇気ないよ。でも、なぎさには知ってて欲しかったの」

「……」

その後は、上手く返事ができていたか不安なんだけど、普通に今週の授業の話をして、椿は笑顔で帰って行った。

はあゝ3人の関係が壊れる時が来てしまったのかな、ひとりぼっちになってしまうのかも……私はどうしたら良いかわからなくなっていた。

その6

今日はビックリする事があった。鹿島から呼び出しをうけてしまった。

周りの人は誰も気付かなかったと思われる早業で手紙を渡されて……かなりびつくりで、読むと大学終わったらある場所に来いという手紙だった。凄く丁寧に地図が書いてある、織笠には秘密らしい。

大学が終わり——手紙を渡された後の授業は何をしたか覚えてないさ——俺は待ち合わせ場所に向う。

ある場所は公園だった。大学の近くにこんな場所があったのか！さすが地元民？ 穴場っぽいね。

少し時間は早いかもしれないが鹿島を探すと、ベンチに座っているのを発見！ 歩いて向かう。

「よー！」

「……」

何だよ元気ないな……隣に座ったら、ふと思った。立って並ぶと目線が同じくらいなのに、座って並ぶと少し見下ろす感じなのは何？ 鹿島足なげーよ。

「何じろじろ見てんのよ」

「足長いと思つて」

「はあー緊張感なさ過ぎ」

実はドキドキしまくってるんだけどな。

「話つて何？」

「あんた好きな人いる？」

「いるけど」

目の前にね。

「それは椿？」

ん？ 俺が期待した展開じゃないようだ。

「いや違うけど、それがどうしたんだよ」

「え！ 違うの？」

「違うよ。だから何」

つい声が険しくなる。

「いや何でもない」

彼女はそう言つと俯いてしまった。

「俺の気持ち探りにきたのか？」

「そんなんじゃ……」

なんだか落ち込み始めた。

「いいから話してみなよ聞くから」

色々残念だったけど、彼女と話せるのは嬉しかった。

その7

私の彼と2人っきりで会ったら、色々話してしまうという予感はどうだった。

変な勢いで、私は言ってしまう。

「私は椿が好きなんだ」
「んで？」

予想外の反応で戸惑う。

「え！ 気持ち悪いとか思わないの？」
「は！？ なんで」
「だって女同士だし……」

「好きになるのに性別関係あるの？ まあ、さすがに男を好きになっても抱きたいとは思わないだろうけど」

なんだこの反応は……私が隠していたのがバカみたいじゃないか。

「俺は気付いてたしビックリもしないよ」
「なんで」
「なんで？ 好きだからかなやっぱ」

好きって私の事だったのか……それより、私の気持ちはバレてたのかな？

「おい！ フリーズするなよ」
「いつから？ いつから気付いていた」

「3人で話したり行動するようになってすぐかな？」

私が不安そうにしているのに気付いたのか彼が言う。

「多分俺しか気付いてないから平気だよ」

「じゃあ良いか」

「……はあ」

彼がため息を吐いている??

その8

はあく。彼女は、俺の事なんてどうでも良いんだな……。わかってた事だけど、目の前で見ると正直へこむ。

「結局、何話したかったんだよ？」

「え〜と何だろう」

困り始めているよ……。

勢いで自分の好きな人をお互い知ってしまったのね。俺の告白はスルーされるし、やってられっか!!

「じゃあ、俺帰るな」

「待ってよ」

「じゃあ待つ」

けど彼女は何も言わない。

「帰るよ」

「今日の事、椿に言わないでね」

もうなんなんだよ……腹立ってきた。

「言つかよ!!」

吐き捨てるように言って、俺はその場を後にした。

歩いていると、だんだん冷静になってくる。変に期待してた自分

が情けないな。

明日から、3人の関係は変わってしまうのだろうか……。

その9

彼が早足で公園を出て行った。

動く気がなくて、しばらくベンチでぼくとしていた……。

「はあ、何やってんだろ私は……」

次の日、彼は特に変わる事なく私たちと行動していた。

私が壊れてしまうんじゃないかと恐れていた3人の関係は……表面上何も変わりなかった。

そう、表面上だけは……。

大学が終わり、帰る方向が違う彼とは別れ、椿と2人で帰り道を歩いていた。

「なぎさ」

「なに？」

「隆君に、告白するかも」

「え!？」

「なぎさに気持ちを言ったせいかな、今日、凄い意識しちゃった」

「うん」

「だからね、もう我慢できないかもしれない」

「そっか」

思考が停止して何も言えなくなってしまった。予想できた事だよね。うん。

私は必死に冷静になろうとする。でも……言葉が出ない。

「そんな心配しなくても大丈夫だって」

私が何も言えずにいるのを勘違いしたみたい。

「あたってくだけるだよ」

「くだけちゃダメでしょ」

「うん。くだけないように頑張るよ」

「うん。が、頑張ってね」

自分の言葉がうまく言えない。

表面上は楽しそうに椿と話して別れた。

もう結果は予想できる。

その結果は……私が望んでいる結果なのかも……私は最低だ。

酷く自己嫌悪になった。

その10

俺は昨日の事があって、彼女に合うのが少し怖かったのだが、特に変わりなく拍子抜けした。でも、何か無理してるように感じるんだよね。

そして、織笠が最近、少しずつ感じが変わってきていたのは気付いていた。ゆっくり考えたら……昨日の事もあって色々わかってしまう。

あゝもつと鈍く生まれたかったよ。ほんと……。

俺たち3人は、今、微妙なバランスで成り立ってる。

2人と別れ、帰りの道を歩いていると後ろから声がした。

「青木」

呼ばれた方を見ると、最近仲良くなった進藤が走ってきた。とある授業でグループを作る事があって、たまたま近くに居た進藤たちを誘ったのだ。たちという事で、もう一人いたのだけど、その子かなりの美人さんだったので、うちのグループは、女子のレベルが異様に高くなった。ちなみに、進藤はそうとう変わったやつだが良いやつだ。またも、長々説明読んでくれてどうも！

「おう、なに？」

「返事が遅いな」

「説明してたから」

「は？」

「こっちの話だ、何かようか？」

「見付けたから呼んでみた。そして走ってみた。用はねえよ」

つか走ってきたの意味なかったのね……ほら変ってるでしょ？
大学で出来た初めての男友達がいっつなのかと思うとちよつと嫌。

「あ、いつもの2人は？」

「帰り道が逆だよ。そっちこそ……え」と工藤さん？」

「工藤はお前らと違って、いつも一緒に居る訳じゃないから」

「そうか。あのさ、俺らって一緒に居るイメージなの？」

「事実だろ」

「あ……」

「あゝなんだよ？」

「いやいいんだ」

そうかもなつて改めて思っただけ……。

「ふゝん。まあいいや」

その後は、ダラダラと話しながら歩いていて、途中で進藤はバイ
トらしく別れた。

はあゝ周りから見ると、いつも一緒に居る感じに見えるのか……
いつまで3人でいられるだろうか？

俺はあまり時間がない事を感じはじめていた。

その11

椿が告白するかもと宣言してから数日が経っていた。

椿から会いたいとメールが来る。待ち合わせの場所に付くと、別れる前はあんなに笑顔だった椿が泣きそうな顔で私の前に立っていた。

別れる前の雰囲気が、少しいつもと違うような気がしていたのだけれど……。

すべてが変わった事を……私が恐れていた事が現実になったのを感じた。

もう明日からは仲の良い3人グループは無いのだな……。

「あはは、ふられちゃったよ」

「うん」

「何がダメだったんだろ」

「うん」

「……あの」

「もう何も言わなくていいから」

私はそう言うつと椿を優しく抱きしめた。

軽く頭を撫でて、背中をポンポンと優しく叩く。

ず～とここまで我慢していたのだろうなきつと、椿が私の胸の中で泣いていた。

これが私の望んだ事なのかな？ 2人つきりに戻りたいと少しでも思った罰でしょうか？

私は幸福と不幸を同時に感じる体験をした。

その12

ただただ憂鬱だった。昨日の事を思い出す。

織笠に呼び出されて、二人で話しをした。

もう呼び出されて時点で、何が起こるかわかっていたけど……。好きだと言われても俺の心は動かなかった。

「ごめん」

「あーうん。わかった……」

何がわかったんだろうか、気丈に笑って俺の前を立ち去る感じが織笠らしかった。

たぶん、鹿島の所へ向かうのだろう……。

はあーもうどうにもならないのだから、昨日の事はもうしょうがない。

思い出さないように記憶を強引に閉じる。

はあー今日同じ授業あんだよな……。もう最悪だ。なんだか溜め息ばかり付いてるな。

どうしても鈍る足を強引に動かして教室へ向かう。

教室に入ると俺は一番前の端の席に座った。2人はどっかに座っているのだろうな……。

酷く隣が寂しかった。

たぶん、周りの連中は何かあったのを察したろし本当嫌になる。出来るだけ授業に集中した。これまでで一番集中して授業を受けたと思う。もの凄い疲れた。

その後、どうにか全ての午前中の授業を終え、俺は体を引きずるように学食に向かった。

その13

椿が私の胸の中で泣いた次の日、大学で椿と会うと、私は椿の顔をまともに見れなくて、うまく話せず困った。少しぎくしゃくしたまま、2人で黙って教室に向かう。

教室に入ると、ちょうど2つ空いている席があったので、そこに並んで座った。

昨日までなら違う席を探してたんだよね。どうしても、違和感を感じてしまう。

授業が始まると、私は気にしないようにする為に授業へ集中した。

授業中、少し気になって、隣に座っている椿をそっと見たら、泣きすぎて目が腫れていた。

昨日、私と別れたあとも泣いてたんだろうな……。

何となく椿の視線を追うと、あいつが座っていた。

どうしようもなく寂しかった。

2人に戻れて嬉しいはずなのに、椿を独占できるのに……。

それから、私は少し嬉しくて、少し寂しい2人っきりの時を過ごした。

大学生活が始まったばかりの状態に戻っただけ、そう思うようにする。

その後、彼は、いつかの授業で一緒のグループになった事がある、確か進藤君と工藤さんと一緒に居る事が多く見かけるようになった。

私たちは大学内ですれ違っても声もかけない……椿は凄い目で工藤さんを見てたけど……。

3人で一緒に行動してたのがウソみたいだった。

その14

学食に行くと、進藤と工藤が2人で座っているのが見えた。

俺は2人に近づいて言った。

「一緒に食べていいか？」

「あれ、青木君どうしたの？」

「2人にふられたんか？」

び、微妙な所を……俺が言葉に詰まっていると……。

「「凶星!?!」」

2人でハモルなよ……。

「いや、違うから」

「「へ」」

だからハモルな。はあ。

「お邪魔して悪いね」

「別にいいけど」

「でも、2人つきりが良いだろ」

進藤が諦め顔で言う。工藤さんは楽しそうだ。

「はあ、おまえも誤解してるのか」

「あはは」

「俺たち別に付き合ってるから」

「そうそう」

「えゝそうなの」

ちょっと意外だった。俺は普通に2人は付き合ってるのだと思い込んでいた。

「工藤が友達いないから一緒居るだけ」

「ひどい」

「事実だろ」

「……」

少しむっとしてた工藤がにやりと笑っていった。

「ほんと私たち別に付き合ってるからね！ 進藤君はロリコンなので同じ年には興味ないみたい」

「ちが「事実でしょ！」」

「つく。まあ、年下と付き合ってるけど、そういう趣味じゃないからな！」

必死だな、進藤笑えるよ。笑うのを我慢して聞いてみた。

「おう。っで、いくつ下と付き合ってるの？」

「3つ」

「ぎりだな」

「ぎりよね」

「うるせゝよ。おまえら」

「へゝそんな彼女が居たのか」

「うわ、最悪だ……」

2人と会話していたら自然と笑えて力が抜けた。

このあとも2人は、鹿島と織笠と一緒に行動しなくなった俺に、何があつたのか聞かずにいてくれる事を素直に感謝した。まあ、冗談半分でつつこまれる事は多々あつただけだ。

俺は進藤と工藤、2人と一緒に行動する事が多くなった。鹿島とひよんな事から再会するまでの間は特に……。

その15

3人から2人に戻って、だんだん違和感が消えてきた頃。

私は久しぶりに、1人で電車に乗って、買い物に出かけていた。そして、帰りの電車の中は空いていたので、すっかり油断していたのかも。

私はもうすぐ降りる駅だったので、ドアの近くの手すりにつかまって立っていた。

その時、いつの間にか後ろにくつつくように立っている誰かに気付かなかった。

突然、自分の体を触る不愉快な手の感触が……。

怖い、気持ち悪い、パニックになって動けず何も出来なくて、私は『誰か助けて!!』と、ただ心の中で叫んでいた。

その時、ふと私に触れていた手の感触が消えた。

近くで声が聞こえる。

「大丈夫か？」

見るとあいつがいた。

「ごめん逃がした」

「……」

「お前の方見たら顔色悪いし、追いかけなかった悪い」

「……」

駅に着くと、彼に支えられるように電車から降りた。
あれ？一緒に下りて良かったのかな……。
あゝ気持ち悪い。ダメだ。何も考えられない。

「何で逃げるとかしないの」

「こ、怖くて。う、気持ちわるい」

一人で立っているのが辛くて、ちょうど隣にあった彼の肩に頭を
あずけた。

「え、おい」

彼が優しく私の背中を撫でる……。ちょっと……。

「……」

「えゝうわ！」

おもいつきり、彼の上着を汚した。

「ごめん」

「いいけど、着替えくれ」

「だから、ごめん」

吐いた事で、気分が良くなったのだけど……。
凄い酷い事をしてしまった。ど、どうしよう。

「ど、どうしたもんか……。んゝ着替え買ってきて」
「うん」

「あゝでも、大丈夫？」

「大丈夫買ってくる」

「適当で良いから、ＴシャツだけでOK」

「うん」

「本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だって」

彼が心配そうな顔をしている。居たたまれない事もあって、私は着替えを買いつゝ為にその場をすぐ離れた。

その16

織笠の告白を断ってから一ヶ月ほど経っていた。

俺は携帯を買いに出かけていたのだけど、電車の中で偶然あった鹿島を助ける事になった。

あの2人に連絡とれなくて不便だから！ と、買え、買えとせつつかれ、しぶしぶ買う事にしたんだが……心から2人に感謝！！

そして、色々あり——結構大変だったんだよほんと——着替え終わったあと、鹿島がお詫びに奢るという事で適当な店に入って2人で話しをしていた。

「男嫌い、サイテー」

俺も男なんですけど……はあ。

「ねえ、俺も男なんですが？」

「あゝそうだったね」

「……男と意識されないのは、まあ別にいいんだ……いや良くないか、でも少ししか気にしてない……んゝそうでもないか」

「はいはい。何が言いたいの？」

「性別とか関係なく見てくれるの結構嬉しい。俺は、多分、おまえが男でも好きだと思うんだ。あ、その時は恋愛感情は抜きね」

「うん」

「だから……性別関係なく特別みたいなの……うゝん。うまく言えないな」

「そう」

「あゝでも、痴漢を羨ましく思ってしまう自分もいるしな……うわ最低」

「ふゝん。あのさ、それって誰でも良いの？」

「え？」

「私の事好きだから羨ましいの？」

さらっとよく言うな……。

「だよ。当たり前でしょ」

「そつか。じゃあ何で触んないの？」

「何にその天然発言は！ 嫌われるのが一番嫌だ」

「うん」

「おまえに嫌われたくないから、嫌がる事はしないよ」

「うん」

「……」

「……」

突然話しが途切れてしまつて変な間が出来てしまった。
その沈黙を破るように彼女がぽつりと言う。

「あの、さっきはごめんね。で、ありがとう」

「うわ。鹿島からお礼言われたよ。ちよつと感動」

「なにそれ！」

「き、気にするな」

「……まあいつか。あのさ、また話しかけて良い？ 携帯買ったんでしょ番号教えて」

凄……何だこれは夢か？？

「い、良いけど」

初めて登録した携帯の番号とメルアドは鹿島になった。

その17

あいつに助けてもらってから、メールの交換をしている。

彼は初めて携帯を持ったらしく、メールの返事は少し遅かったりする。でも、少しずつ慣れてきてるみたいかな？　あと、はじめの頃は、変な文章で返事がくる時があって笑えた。

凄いわい変な再会だったけど、あ、あまり思い出したくないな……うう。え、えくと、そう、変な再会だったけど、普通に話せて自分でちよつとびっくりした。

私は相変わらず大学にいる時は、椿と2人でほぼ一緒に行動しているのだけど、少し変化が起こっていた。私にとっては嬉しくない変化が……。

「田崎くんがね」

「うんうん」

最近、椿と話すと田崎くんという名前がでる事が多くなっていた。椿は最近バイトを始めて、その職場に私達と同じ大学の男、田崎君がいたようで、同じ大学って事を切っ掛けに、話しをするようになったようだった。男の人が苦手だった椿にとっては凄いわい成長だと思ふ。

「ねえ聞いている？」

「あゝごめんごめん」

今の所は、別に嫉妬するような事じゃないのにな。

どうしても心がざわつく、椿はバイトの話しをしているだけなのに……。

そして、最近の椿は、暗い表情が減って、よく笑うようになった気がする。

それは誰の影響？ 私じゃないよね……。

何で私じゃないのだろう？ まあ当然んだけど……やっぱり私は選ばれる事は無いのかな。

どうしても認めたくないよ。はあゝ。

寂しさを埋めるように、私はあいつにメールをした。

その18

俺は好きな人から。。。をかけられるという貴重な経験をした。

。。。は各自埋めてほしい、さすがに彼女も話題に出されたくないだろうし。

そして、そのちょっと貴重すぎる経験のおかげで話しができて、俺の携帯のメモリーに彼女の番号とメルアドが登録された。

結果オーライ？

あれからメールが結構来るようになった。話しをしたいと言ってくれたのは社交辞令じゃなかったようだ。素直に嬉しい。

来るメールの文章を読んで思うのだけど、直接会った時の彼女とメールの彼女は印象が違う気がする。

なんだろう、メールの彼女の方が無理してない感じがしたり……まあ、俺の勝手な感想だけど。

話しがだいぶずれた気がするが、この事は言わないとダメだろう、今日は凄いメールが来た。大学が終わったら遊ぼうというメール。

勘違いしそうになるんですけど、鹿島さん……。

ありえないと思うのだけど、どうしても期待してしまう自分が情けない。

前も変に期待して失敗した感じだし、期待するのは止めた方が良いののはわかってるのだけどね……嬉しい事には変わらないからまあ

良しとしよう。

大学が終わって、2人で遊びに行った場所はカラオケだった。彼女は歌うのが好きらしい。けど、ちよつと下手だった。聞くに堪えないとかそういうレベルじゃないけどね。

俺は特に何も言わなかったのだけど、彼女が歌い終わると言った。

「好きだから良いの。上手くないのは自分でもわかってる」
「なるほどね」

歌の上手さなんか別にどうでも良かった。

2人で居れる事が幸せだったから。

その19

ほんと少しずつだけど、椿が私から離れているのを感じていた。最初の切っ掛けはバイトを始めた事だと思う。

私はその事を見ないように、気付かないようにしていた。でも、一緒にお昼を食べていたとき現実を見せられた。

彼女の雰囲気少し変わって、真剣な声で言う。

「なぎさ。ちょっと良い？」

「うん」

「何か良いな〜って思う人が出来た」

「え！ た、田崎君？」

「うん」

椿が可愛く笑った。どう反応していいかわからない、私は上手く心がついていかなかった。

そう、2人で行動するようになったからって、私を好きになるわけないのだ……。

私は何を期待してたんだろう？

それから、椿はその男との事を私へ良く話すようになった。

そして、順調に仲が進展しているようだった。私が何となく苦し紛れに言ったアドバイスも上手くいってる要因の一つだったりして

……自分の首を自分で絞めてるな。はぁ〜。

1人でいるのが嫌で、私からあいつへ会おうと言う回数が増えていった。

他の友達もいるのだけど、椿への気持ちを知っているのは彼だけだし……。

どうしても、頼ってしまう自分がいた。

その20

最近、彼女と会う回数が増えてきた。

彼女と話しをする機会も多くなってわかった事だけど、織笠に好きなやつが出来たらしい、そして、その相談に彼女はのってるみたい。

らしいと言えば彼女らしいのだけど無理してそうだよな……まあ、人の事言えないか。

だんだん不安定になっているのを見るのはやっぱり切ない。

どうしたらいいのだろうか？

今日も大学が終わったあと2人で遊んでいた。

2人の中でお決まりの遊びとなってきたのだけど、カラオケに歌いにきている。

1時間ほど交互に歌っていて、さすがに少し疲れて休憩していた。

彼女がぼつりと言う。

「ねえ」

「なに？」

「椿に好きな人が出来たみたい」

「あゝそうみたいだね」

「でね、うまくいつてるみたい……」

「そっか」

「そっか、じゃない！」

「じゃあなに？」

「べつに……」

俺は、はっきりしない彼女にイライラして投げやりに言う。

「別れちまえば良いな」

その21

「別れちまえば良いな」

そうなのかな、そうしたらまた椿が悲しむそれは嫌だでも……。

「まだ付き合ってるわけじゃないよ」

「あゝそうなの、でも、上手くいくと嫌だろ」

「そうなのかな？」

「どっちなんだよ！」

「わからない」

私はどうしたいのだろう……話しをしたら余計わからなくなってしまう。

八つ当たりなのは、わかっていたけど、つい言ってしまう。

「あんたに相談するんじゃないかった」

「何だよそれ」

「私の事好きなんですよ」

「うん」

「抱きたいの」

「そりゃね」

「バツカじゃない！」

「ひでゝな」

「私は男は嫌いだから」

彼が一瞬傷ついた顔をした。でも、すぐに彼は笑う。

な、何で笑えるの？

自分の言った言葉を後悔した。

その22

「私は男は嫌いだから」

ズバツときた。俺の前だとほんと容赦ないよな……。まあ、いつそ清々しいと思うよ。

「あいつは男が良いみたいだぞ」

「うゝそういう事言う」

「先に言っただのはそっちだが」

「しょうがないでしょ。あんたしか言う相手ないんだから」
「逆切れですか」

彼女が泣き出してしまった……。ちょっと言い過ぎたかな。
彼女が泣きながら言う。

「私の事好きなら優しくしてよ！」

「……」

「あの子に好きな人の相談されてる私は何なの！ もう嫌だ！
なに私はあんたに同じ事してる。自分が嫌なのに最低」
な

彼女の頭を撫でようとしたら、手を振り払われた。

「やめてよ」

俺は彼女の頭を怯まず撫でる。

「いいから、泣けよ」

「……うん」

泣き止むまで、彼女の頭を優しく撫でた。

その23

あゝ今日は一杯泣いてしまった。

何であいつの前だと泣いてしまうんだろ。そして、酷い事ばかり言ってしまった。

冷静になって振り返るとヤバいと思う。彼は何であんなに優しくしてくれるんだろ。

う……やっぱり好きだから？ でも、こんな女なのに。

さっきの事を考えていたら、頭を撫でられた感触を思い出してしまった。

うあゝ。凄い恥ずかしくなってくる。

甘えてるな私は……。

好きって何なんだろ？

誰に尋ねるわけじゃないけど、ふと思ってしまった。

こんな気持ちが無ければ、楽しく3人で大学生活を過ごしていた気がする。

疲れてるのかな？ 無理な事言っても始まらないよね……。

あゝ大学行くのが嫌だな、こんな気持ち初めてだ。

私は彼にメールを送る。

『やつきはごめん』

すぐに返事が来た。

『
気にするな
』

私はその返事を見て安心して眠りにつけた。

その24

今日は疲れた。

ベッドの上に仰向けに寝て、天井に手を伸ばす。
自分の手を見ながら思った。

もう頭撫でるの無理だな……。

ただ、切なかった。撫でるんじゃなかったな。いや、ほんと。
側にいるのが少し辛くなりそうだ。

そして、どうしても彼女の言葉が胸に刺さった。

俺はMなのでしょうか？ どんな事言われても好きなまま。

この先、何かある可能性なんて無いのに……。

少しでも力になりたい。そう思うのはほんとで、うん。でもね……
はあ。

何が出来るんだろうか？

たぶんこれから傷つくであろう彼女に俺は何が出来るかな……。

俺の思考を中断するようにメールの着信音がした。

『さっきはごめん』

素っ気ない彼女からの謝罪の言葉、彼女らしいな。

『気にするな』

俺は素直に返事を送った。

その25

椿から話を聞いて！ というメールが来た時から何か嫌だった。

最近の椿は、ほんとにキラキラしていた。よく笑うし、その度に私は変にドキドキしたり。いつも楽しそうで……。

そして、会った時に、そのキラキラした椿が言った第一声が……。

「付き合う事になっちゃった」

「あゝそうなんだ」

「でね！」

彼、田崎君からどう告白をされて、どういう気持ちで、そして、返事はどうしたのか……一杯話を聞かされた。

私は頷く事しか出来なかった。

「何かさつきから素っ気なくない？」

「……うん」

凄い幸せそうな椿を前に、私は何を言ったら良いのですか？ 誰か教えてほしい。

「何かあった？」

「こゝごめん」

「??」

「あ、うん。おめでとう」

「うん。ありがとう」

そのあとの記憶がよく思い出せない。たぶん、何か話してど
うでもいい理由をつけて別れたと思う。

気付いたらあいつが目の前にいた。

その26

彼女から、急な呼び出しがあり、会って話しをしていた。場所はお決まりのカラオケボックスです。毎回、同じ店なので、店員さんとはもう顔なじみですよ。

ふと思った。俺たちって、どう見られてるのだろう？ 例えば店員さんにとか……仲いい友達って感じなのか？ 少しは彼氏彼女とかに見えたりするのかな？ ん……あ、話しがずれたか戻そう。

今日の彼女は荒れ気味だった。何となく何があったかわかったのだけど、話を聞いてみると、予想通りというか、織笠があの人と付き合い出したらしい……。

彼女にとっては、2回目の失恋って事になるのか？

「しょうがないだろ」

「うん」

「元氣出せとは……ちょっと言えないか。うん。まあ歌えよ」

「言われなくても、歌うし！ 飲むし！」

話もしないで、ただただ歌う。これで気分転換になれば良いのだけど……。

何曲か歌ったあと、俺がたまたま失恋ソングを歌ったら彼女が言った。

「なに？ 慰めてくれるの？」

「まあ、そうだな。選曲は偶然だったけど」

「偶然なのね」

「悪いかよ」

「悪くないけど、ちょっと私の為に歌ったのかと思ったから」

今、何で俺がここにいいのか、わかってないのか……。

俺が歌っている時に、彼女が何回目かの追加の注文をしていた。
結構頼んでるよな。

「飲み過ぎじゃないか？」

「強い知ってるでしょ大丈夫！」

まあ、知ってるけどさ。色んな意味で、俺の方が弱いですよ。

「……」

ん？ 何か彼女が呟くように言った。

「なに？」

「私の欲しい物を奪うの」

「ん？」

「男はだから嫌い」

「あーうん」

「はあーあんたも男だったね」

「だな。それが関係あるのか？」

「関係あるよ！」

その27

「関係あるよ！」

「……」

「男って結局やりたいただけでしょ」

うゝ嫌な事を思い出してしまった。

急に何もかも嫌になる。彼が余裕たつぷりな感じも凄い腹が立つ。

彼へぶつけるように言葉を言ってしまう。

「さっきも言っただけど、私は男は嫌いなもの！ あんたの事なんて恋愛対象に見れないし、好きになる事なんて絶対ないから」

「それ以上言うなよ」

「ムカついた？」

「ちがう、おまえ何もわかってない、勢いだけで言うことじゃない」「何言ってるの？」

彼が少し苦しそうに言う。

「それは、もうわかってるから」

そして今度は、優しく笑って言った。

「でもさ、好きなもんは変えられないし。ほんと、うまくいかないな」

あゝ……私は気付いてしまった。彼に言った言葉は私に返って来

る言葉だった。

「おい、泣くなよ」

私ってこんな涙脆かったかな？ どうしよう止まらない。

「何で平気なの？」

「平気でもないけど」

「私なんか好きになって災難だったね」

「いや、そうでもないよ。結構幸せ」

「は！？ どこが」

「だっておまえと話せる男って俺ぐらいでしょ」

「あゝかも」

「告白してからちょっと話せない期間はあったけど、その後は、変わらず接してくれたの俺は嬉しかった。それが、まあ眼中に無いからかもしれないけどさ」

「あゝかも」

「同意すんのかよ。まあ良いや。うん、だから私なんかとか災難とか言っちなよな」

「うん。あのさ」

「なに？」

「それで良いの？」

「今は良いよ。ただ側に居たいから」

そう言った彼と視線が合う。ドキリとした。
凄い事サラツと言われたよ。

「……そう」

彼は私が泣き止むまで、ただ側に居てくれた。

その28

「今は良いよ。ただ側に居たいから」

自分に言い聞かせるように言った。ただ側にいるだけで満足しないとダメだ。はあく半分本心で半分ウソな言葉だな。

俺は、泣いている彼女の横で、何も出来ずに座っていた。

彼女と別れ、家に帰って寝ようとしていたら、彼女からメールが来た。ごめんとありがとうのメールが、でも、俺はどうしても返事が書けなかった。

ごめんに対して、気にするなとはもう言えない、気にしてほしいのだから。

何って返事を書けば良いのだから？

はあく。いつまで、彼女の側に居れるだろうか……。

織笠が男と付き合う事で、不安定になってるのは俺の方なのかも？ そんな気がした。

次の日から、少しだけ、彼女との距離をとりたくて、授業の出席には結構余裕があったので、勉強には真面目君なのです。ただ休まず通ってるだけでも言うが……ちよつと大学を休んだ。

その間、メールの返事も書かなかったし、彼女から新たなメール

も来なかった。

その29

次の日、大学で椿に会うのが凄い怖かったのだけど、椿と会って話しても不思議と昨日のように辛くはなかった。

話していると、どうしてもズキリと胸が痛い時はあるけど、それだって耐えられる。普段通りの自分でいられたと思う。

あいつの前で、さんざん泣いたおかげなんだろうか？ それとも、気になっている事があるからなのかな？

気になってる事は、どうしても昨日の夜からずくと私の頭の隅に引っかかっている事。

昨日、彼に送ったメールの返事が返ってきてなかった。いつもはあまり遅れず返事は必ず来ていた……すぐってわけじゃないのだけど……。

昨日の夜、彼と別れて家に帰ってから、だんだん酔いが冷めてきて、冷静になって思い返すと、自分の行動、言動が……凄い反省した。同じ事繰り返してるよね。

そして、この前と同じような感じで、謝罪とお礼のメールを彼に送っただけど……。

やっぱり怒ってるのかな？

「はあ」

「どうしたの？」

「え？」

「さっきから携帯ばかり見てるし、溜め息だし」

「……あーうん」

「ふん」

「……」

「……」

私の携帯からメールの着信音がした。

急いでメールを見ると……椿からのメールだった。

『誰のメールを待ってるの？www byつばき』

椿の方を睨むと、おかしそくに笑っていた。

「どうかした？」

「どうかしたじゃないから……はあ。からかわないですよ」

「ねえ？ なぎさは気付いてないの？」

「え？」

何のことを言ってるの？

「わたしはなぎさも幸せになってほしいって思ってるから」
「……」

たぶん私の顔に？マークが沢山ついていたらと思う。

椿が一つ溜め息をつくとき、呆れた感じに言った。

「返事来ると良いね」

「うん」

あいつからは、その日、返事は来なかったし、直接会う事も無かった。

もう、何でもこういう時にかぎって会えないかな……。

私はどうしても2通目のメールを送る事が出来なかった。
気になるなら、『返事出せ!』っていうメールでも送れば?
と
か、椿に言われたんだけど……。

結局、あいつから返事は来なくて、会えたのも数日後だった。

その30

俺は、自主休講明けで、数日ぶりに大学へ行っていた。昼休みになり学食までの道を歩いていると、彼女が少し前を歩いているのを見つけた。

「よー！」

「あー！ よー！ じゃないよ」

なんだか久しぶりに会った気がする。

少し真剣な顔になって彼女が言った。

「この前の事とか、いつもごめん」

ズキリと胸が痛かった。俺が返事を送らなかったのを結構気にしていたみたいだ。

空気を変えたくて、ちやかすように言う。

「えー！ 何か珍しいなどうした。体調悪いのか？」

「くく人の素直な気持ちを！ よく言うわね」

「俺の素直な気持ちだったんだけど」

「そういう事は素直じゃなくていい！」

その後、彼女が俺が大学を休んでいたのか？ など、つつこんできたけど、上手くごまかせたと思う……いや、上手くなかったかも。

話を聞くと、今日は彼女も1人らしいので、一緒に昼ご飯を食べる事にした。考えてみると、大学内で2人で話すのは初めてに近

い。凄い不思議だ。

「その後どう？」

「え？」

「例の事だよ」

「あゝうん。順調みたい」

何で俺が織笠の交際状況を聞かなきゃ行かないのだよ……まあこいつらしいか。

「違うよ。そっちじゃない」

「何の事？」

「だから、織笠と一緒にいるんだろ？」

「うん」

「それは平気なの？ 大丈夫？」

彼女が嬉しそうに笑っていった。

「あゝうん。大丈夫」

「そっか」

ほっとした。そして、同時に、嬉しそうに笑う彼女の笑顔の相手に嫉妬した。

彼女は、俺と同じ道を行こうとしてるのだろうか？ はあゝ。

その後、午後からの授業が違ったので、昼休みが終わる頃に彼女とは別れた。

その31

あいつからの返事が来ないまま数日が経っていた。午前の授業が終わり、昼休みになって、2人で学食に向かおうとしていた時、椿の携帯が鳴った。

携帯を見ていた椿が、本当にすまなそうに言う。

「ごめん」

「どうしたの？」

「あの、今メール来て、田崎くんと一緒に昼食べないかって」

学年と学部が違う事もあって、大学内にいてもなかなか時間が合わないのを、私は知っていた。

同じ大学なのに、昼休みも一緒に居れないのが多い！と椿が愚痴ってるのを、耳がたこになるほど聞かされていたから私の返事は決まっている。

「あゝうん。気にしないで良いよ」

「ありがとう。明日は一緒に食べれるから」

「別に気にしないでいいから、彼氏優先しなよ」

「うん。でも、ごめんね」

何か謝られると余計惨めな気分になる。

椿と別れた後、他の友達とも上手く連絡が取れず。あゝ1人でお昼どうしようと思いつつ、ひとまず学食へ移動していると、後ろから声をかけられた。

「よ！」

声の方に振り返ると、あいつが立っていた。

「あ！　よ！　じゃないよ」

なんだか、久しぶりに会った気がする。いつもは、大学に行けば、話しはしなくても学年も学部も同じだから、一度はどこかですれ違ったりして会っていた。ここ最近、会えなかったのは、避けられているんじゃないかって不安だった。

あ、そうだ。この前の事を謝ろう。いつもメールで直接言う事って無かったし。

「この前の事とか、いつもごめん」

「え！　何か珍しいなどうした。体調悪いのか？」

「くゝ人の素直な気持ちを！　よく言うわね」

「俺の素直な気持ちだったんだけど」

「そういう事は素直じゃなくていい！」

むかつく事言われたけど、いつもの彼だ。ほっとした。良かった嫌われたわけじゃなかったみたい。

そして、疑問に思っていた事を質問してみる。

「ねえ。最近、大学休んでた？」

「なんで？」

「見かけなかったし」

「あゝちよつと体調悪かったから」

「ええ！」

「なんだよ。そんなびつくりする事？」

「もしかして、あの時も具合悪かった？」

「いや、あの時はべつに」

「そっか〜でも、ごめん」

「謝る事無いけど」

「でもね……」

何でだろうか、凄い落ち込む。

「あ、言ってくれたお見舞いに行ったのに」

「良いよ。悪いし」

「だって、私たち……」

って、なんなんだろう？ 友達なんだから気にするな！ みたいな事言おうとしたんだけど……違う気がした。いや、ほんとに違うのかな……あゝわけわからない。

「ん？ どうした？」

「いや、何でも無い。弱ったあんたを見たかったって話し」

「ひど！ まあいつもの事か」

「私そんな酷くない！」

「無自覚って怖いな」

「……」

話しの流れで、彼と一緒に話しをしながら昼ご飯を食べて、午後からの授業は別だったので別れた。彼は、私が椿と一緒に居る事を心配してくれてたらしい。嬉しかった。

昼休みが終わって、椿と合流したら、椿がぽつりと言った。

「ねえ。何か良い事あったの？」

「え？ 何も無いけど？」

「最近ずくと元気ない感じだったのに、雰囲気変わった」

「そ、そうかな」

「昼休み中に何があったの??」

何かって言われても……あいつと会って話したくらいだけど……
なんだろう、こ、混乱する。私はその混乱から逃げるように、椿に
話をふる。

「何も無いって、そっちこそ嬉しそうだと思うけど」

「少しでも会えると嬉しいよやっぱり」

「はいはい」

「自分でふっておいてその返事は無くない？」

「はいはい」

「もう」

あいつの事を考えると、何か落ち着かない。あれ……自分がわ
からない。ほんとにどうしてしまったんだろう。

その32

大学から家に帰ろうと歩いていたら、後ろから進藤が話しかけてきた。

何か前もこんな事あったな。

「青木」

「なんだよ」

「機嫌悪いな。それはおいといて、大丈夫なのか？」

普通に返事したつもりだったのだけど、機嫌悪そうに見えるのか……。

「あゝ大丈夫だけど」

「まあ、お前たちの事を俺が口出す事無いのだけど」

「じゃあ口出すな！」

「ふう〜じゃ言つの止めるか……」

何だそのもったいぶった言い方は……。

「……そう言つと聞きたくなるのだが」

「どっちだよ」

「じゃあ聞くよ」

「俺たちはおまえの頑張りに感動したよ」

「はあ??」

「今日、昼飯一緒に食べてるの見かけたから」

「あゝでも、普通じゃない？」

「普通じゃないね。俺も詳しく知らなかったんだけど、工藤情報によれば、鹿島さんの男嫌いは半端じゃないって」

「ん？なの？」

「青木は最初から結構普通に接してたから意識ないのだろうな……」

……次の言葉がでなくて、少しの間話しが途切れた。

その変な間のせいだろうか？ 俺は、つい、ぽろっと本音を言っ
てしまった。

「でもさ、逆に辛いよ」

「そっか？。だな」

「まあな」

またもや沈黙。何も話さず2人で歩いていて思う。無理して話し
をしないで良いのが凄く楽だった。

進藤が別れ際に言う。

「無理すんな。頑張り過ぎんなよ」

「おう。ありがと。じゃあな」

一人になって、何となく自分の事を考えながら家までの道を歩く。

離れる事も、近づく事も出来ない、今の状況に苦笑するしか出来
なかった。

その33

今日の大学の授業が全部終わり、私は帰り仕度をしていた。隣の席には、もう椿はいない、椿は彼氏と一緒に帰るらしく、授業が終わると凄い勢いでいなくなった……はあ。

いいや。ちょっと一人で考え事したかったし、私は気持ちを切り替えて、一人で帰る事にした。

よし！ 立ち上がろうとしたら、近くに座っていた女の子2人から話しかけられた。声の方を見ると、何回か一緒に遊びにいった事もある友達だった。

「なぎさ」

「なに？」

「今日遊びにいかない？」

「あゝごめん。今日は無理」

「最近付き合い悪いよね」

「ごめん」

今日は遊んで帰る気分じゃなかったたので断ったのだけど、予想外の返事が返ってきた。

「いやしょうがないでしょ。ラブラブだもん」

「え！？」

「そっか！ 良いよね。2人揃ってラブラブ」

「なにが？」

「だから、織笠さんも彼氏できたみたいだし」

「あゝうん。でも、何で2人？」

「あれ？最近、青木君だっけ？一緒に遊んでない？今日もお昼

「一緒だったでしょ？」

「「良いな」」

あいつと遊んだり、昼一緒に食べてたの、見られていたんだ…。

「ち、ちがう」

「違うの？まだ付き合っていないのか」

「だ、だから」でも、大丈夫だよ。青木君は、なぎさにべた惚れと見た！」

「あゝだよ。告白も時間の問題か？」

「た、ただの友達だから」

「「ふゝん」」

「……」

はあゝ私の否定の言葉なんか聞きやしないし……時間の問題じゃなくて、されて、もの凄い酷い断り方をしてるって……あ、でも、ちゃんと付き合ってたかは言われた事無いか、私は断ったというより男全般拒絶だし……はあゝどっちにしる酷い事してるよね……。

「じゃあ、私たちの事はほつといて遠慮なく帰って良いから！」

「……うゝん」

勢いに押されて、私が戸惑っていると。

「じゃあ、先行くね」

「……」

「「バイバイ」」

「あ、またね」

2人が凄い笑顔のまま帰っていった……何さっきの笑顔は……か、勘違いなのに！

でも、他人からはそう見られてたんだ。そして、自分はどう思ってるんだろぅ?? 自分の事なのにわからない……答えが出ないよ。

私は帰るタイミングを失って、教室にぼつり一人残ってぼろとしながら窓から見える景色を眺めた。

その34

な、何なんだ。

今日の彼女は変だ。すれ違った時にちよつと声をかけたら、返事を返してくれたけど、なんか挙動不審に逃げられた。彼女が受ける授業は、俺の受ける授業と同じ建物の別教室だったはずなんだけど……。

昨日は普通だったよな？ 昼と一緒に食べて別れた後に何かあったのか？

き、嫌われるような事してないよな？ 不安になる。

そして、今日は進藤が休みらしく、昼飯を工藤と一緒に食べる事になった。

2人で食べるのは初めてかも？

工藤の行動もちよつと変だった。

「ねえねえ」

「え？なに？」

そう言つて手招きするので近づいたら。

「あゝ言う事忘れちゃった。ごめん」

「なんだよ。まあ良いけど」

食べ終わったら終わったで、いつもはしないのに俺の分まで片付

けてくれたり、次の授業へ向かって歩いていたら、突然腕を組もうとしたりする。

「なあ、さっきからなんだよ」

「まあ、色々あるんだよ」

「は？」

「あゝ私って性格悪いなゝ」

「いや、工藤は性格悪くないよ」

「……ありがとう」

「んゝでも、今日の行動はわからん」

彼女がおかしそうに言う。

「そう。いつかわかるから」

「……教えるよ」

「ダメ！」

「じゃあ後で教えて」

「了解！」

凄い楽しそうにしている。こ、怖いな……。

「あゝそうだ。進藤君に報告しよゝ」

そう言ってメールを打ちだした。何を報告してるんですか工藤さん……。

その35

今日は、あいつの事を意識しすぎて変な事ばかりしてしまった。

まず、1限の授業が始まる前に、予想外に会えたから、挨拶を返せたけど、逃げてしまった……同じ授業じゃないけど、教室がある場所は同じ建物の中……同じ所に向かうはずなのに逃げるって……絶対変に思われた。

そして、昼休み、私は椿とお決まりのように学食に行っていたのだけど、彼が工藤さんと2人つきりでお昼を食べていた。彼はこっちには気付いていなかった。

私は2人から、目が離せなかった……。

工藤さんの行動に全部反応する自分がいて、彼女が最期に私を見て、微笑んだ時、全部意識してやっていた事に気付いた。嫉妬心とか、羞恥心とか、もう感情が良くわからなる。

八つ当たりで、飲み終わったジュースのパックをゴミ箱に、おもいきり投げ捨てたら、椿に変に心配されてしまった……。

あはは……でも、気付いたよ。

凄い今更だけど、あいつへの気持ちを実感してしまった。

そして、過去の数々のあいつへの言動に凹んだ。自業自得だけど……絶対嫌われていると思う。少なくとも、私の事はもう好きじゃないよね。

きれいさっぱり、これでもかってほど、拒絶した相手を好きにな

る私って何なんだろう……。

絶対、男の人を好きになる事は無いと思ってたんだけどな。

上手く言えないけど、いつか私に言ってくれた、あいつの言葉が、今、凄いわかる。性別じゃなくて、あいつが凄い特別になった感じ。でも、男の人としても意識してると思う。そして、まだ椿への想いも、くすぶってるのも感じている。何か私の中はぐちゃぐちゃだ。

またあいつに頼ってしまう事になるけど、気持ちを整理してちゃんと向き合いたい。

その結果がどうなるうとも。

私は「会って話を聞いて」と彼にメールを送った。

その36

彼女から会って話を聞いてほしいとメールが来た。

場所はいつものカラオケボックスじゃなくて、お互いの想いを最初に知った、あの公園だった。2人でベンチに座る。周りを見ても今日は人がほとんどいなかった。

だんだん暗くなってくる、空を見上げながら、彼女が話し出すまで黙って待っていた。

彼女がぼつりと言う。

「私の想いを聞いて」

「え？」

「椿に直接、伝えるつもりないしさ、あんたに聞いてもらえれば少しね」

「じゃあ、聞くよ」

彼女は区切りをつけるみたいだ。俺はまだ凄い中途半端なまま。なんだか情けない……。

「うん。ありがとう」

「あーうん」

俺の方を真っ直ぐ見て彼女が言った。

「椿の事ほんと好きだったの」

「うん」

「でもさ、もう無理みたい」

「うん」

「ただただ椿の幸せを祈るよ」

「そっか」

「うん」

そう言うと、彼女の瞳から涙がこぼれた。

「最近泣いてばかり」

「いいんじゃない？」

「あゝこれからも上手くいくと良い。あの野郎！ 椿を泣かしたらただじゃおかない！」

「……怖すぎ」

「うるさい！」

「泣きながら怒らないでも」

彼女が急に俺に抱きついてきた。

俺の胸の中で彼女が泣いていた。俺は何も出来ずにただ途方に暮れる。

……気が狂いそうだった。

その37

自分で色々不安があったのだけど、ちゃんと彼に話しが出来た。
今日だけ椿への想いの為に泣こう。ちゃんと明日から、彼だけを見れるように。

彼に抱きついて泣きながらそう思った。

次の日から、大学がある日は、私から誘ってだいたい授業が終わった後に、彼と公園で話しをしていた。けど、どうしても彼には気持ちには言えなくて……。

一緒に居るだけで満足してしまう私は、話す話題にも困ってしまつて、椿の話を聞いてもらっていた。

そういう事で、話題が椿の話しが中心で、たぶん彼はまだ私が椿の事を好きだと思っているはず……椿の事は、まあ、好きなままだけど、もう意味は違っていると思う。

はあゝ自分の意気地のなさが泣ける。怖いのだ。

自業自得つてこの事なんだろうな。

彼は私の誘いを何か理由が無ければ断らないし、話しは聞いてくれる。

でも、一緒にいても彼は何となく上の空な時があったり、私といても楽しそうじゃ無い……そんな気がする。

たまに辛そうな顔をするは気のせいと思いたい。

今のまま、友達の間まで良いから、ずっと傍にいたい。私はそう願った。

その38

『大学終わってから、時間あったら話しをしよう』

と、というようなメールが、公園での話しを聞いた次の日から、毎日彼女から来る。大学が終わったら、毎回カラオケに行けるわけなく……そんな金はない。あの公園に行くのが日課になってきた。

会つと、彼女は織笠の話しをする。あの告白は区切りをつける為じゃなかったのかな？

やっぱり好きなままなのだろうか？ 最近の彼女がよくわからない。

そして、距離が近いと思う。気付いてるのか？

あゝ嫌われたくない。

なんだこの気分は、もうキツイ……。

自分で傍にいただけで良いって思ってたんだけどな……情けない。

はあゝもう無防備に近づかないでほしい。

ベンチに並んで座ると彼女が普通に俺と距離を空けずに座った。

あゝだから近いって……。

彼女の話しを、上手く聞けなくてへこむ。

ちよつと話すと、変に沈黙が出来てしまう。

俺は前どんな風に話してたのやら？

日に日に気まずい雰囲気になってると思うのだけど、何でそれでも、会って話しようって言うてくれるんだろ??

その39

この頃、自分の思考が変。

どうしても、あいつの事を考えてしまう。声とか、言葉とか、頭を撫でられたときの感触とか、思い出しては一人で、焦ったり照れたり……。

あはは……私がこんな状態になるなんて、思ってもみなかった。

会った時に、こうしよう、ああしようと考えていても、彼の近くに座ったら、考えてた事なんてどっかに飛んで、何も出来なくなってしまう。はあゝ。

どうしたら良いのかわからない……彼が私の誘いを断らないのが救いだった。

今日は、2人揃って大学の授業が午後まで詰まっていて、公園に来るのがいつもより遅くなっていた。

さつきから、色々話しかけているのだけど、返事が無い。

今日は喋ってくれないのだろうか？

疲れてるのかな？ 体調悪いのかな？ 心配になる。

自然と彼のおでこに手をおいた。

少し冷たかった私の手が、彼のおでこの熱で少し暖かくなる。ほんの一瞬の出来事だったのだけど、凄い幸せを感じた。

「熱は無いね」

彼は、はっとしたように、私から離れる。

私の心がグサリと痛んだ。　　うわ！　嫌がられてしまった。

その40

はあゝ2人で公園に来たの今日で何回目だろ？

少し公園に来る時間が、遅くなったため、夕日が見えた。
まだ沈むまでは時間はあるかな？ 結構きれいかも……。

彼女が何か話しかけてきていたけど……今日は開き直って黙っていた。

ぼーと夕日を見る。ちょっと泣きそうになってしまった。なんだか情緒不安定??

手を伸ばせば届く距離に好きな人が座っているのだ。今の状況は、俺にとって幸せだろうに……。

「ねえ」

「……」

「ん？どうかした？」

「……」

「今日なんで喋らないの？」

「……」

彼女が何か考えた後、俺のおでこに手をおいた。
少しひやりとする彼女の手が気持ちいい。

そんな長い時間じゃなかったと思うのだけど……。

「熱は無いね」

少し意識が飛んでいた、彼女の声で我にかえる。ヤバいと思って離れた。

彼女を見ると、傷ついた顔をしたような気がする。

な、何でそんな顔するんだよ。もう知らない。限界だ。

彼女の頭を優しく撫でる。

「え？ なに？」

彼女が少し笑うと気持ち良さそうに目を閉じた。

自然と彼女に近づく……唇を重ねると彼女がびっくりして目を開ける。

目線があった。感情があふれるよ。愛おしさ、切なさ、ごちゃごちゃだ。

何やってんだ俺は……自分の制御が出来ない。
これ以上一緒にいたら、もうなにになってしまうか自分でわからなかった。

彼女を傷つけても……とか、自分の思考が怖い。

立ち上がって、彼女から離れる。

「え、え？ ちょっと」

ダメだ。泣く。悲しさだけじゃなくても泣けるんだな……。

呼び止める声が聞こえたけど、泣いている所を見られないように、彼女に背を向け、歩いてその場から離れる。

もう一緒にいられないと思った。

その41

一瞬状況がわからなくて、ぼーとしてしまう。ど、どうしよう。

「ま、まってよ」

どうにか声に出していつてみたけど、彼は止まるはずも無く、どんどん歩いていってしまう。

よくわからないけど、今、追いかけないともう会えないと感じた。

私の視界から消えそうになっていた彼を走って追いかける。

公園から出そうになっていた所へ追いついて、彼の肩を掴もうとしたら、振り払われてしまった。

彼が言う。

「もう近づかないでくれ」

彼が泣いてた……。

「好きなんだ」

「……」

「くそっかっこわる」

「……」

私の体が自然と動いて彼を抱きしめていた。

「同情すんなよ」

「違うって」

「男としてみれないのはわかってるから」

そう言つと彼が私から離れようとする。離れないように抱きしめる力を強くして、私は叫ぶように言つた。

「だから違うって!」

「……なにが?」

切なかつた。全部私が悪いのだけど、私の言葉で彼がどれだけ傷ついていたのかを実感してしまった。悲しい、けど、凄じ嬉しいよ。まだ好きでいてくれたんだ……色んな感情が溢れて泣けてきた。

「何でおまえが泣くんだよ」

「しょうがないじゃん」

あゝ色々考えすぎないで、こうすれば良かったんだ。もっと早く自分の気持ちに素直に行動すれば良かった。彼を傷つけずにすんだかも……少しでも、彼の傷が癒えればと、ただ優しく抱きしめた。

どれくらい時間が経つたのだろうか? 彼が呟くように言う。

「あ、あのさ」

「なに?」

「いつまでこの格好でいるき?」

「嫌なの?」

「そういう事じゃなく……つか、おまえ平気なの?」

「平気だけど?」

「お、俺は平気じゃいれない」

「うん」

「だ、だから離れて」

「嫌！」

「さつきから、わけわからない……」

いいかげん気付いてくれないもんかな？

「つかさ、最近のおまえの行動が意味不明」

やっぱり、ちゃんと言葉にしないとダメだよ。でも、つい言うてしまう。

「ニブイね」

「だからわかんないって！」

ふう。私は一つ息を吐いてから言う。

「あのさ……好きかも？」

「はああ？」

「なにそのリアクション」

「それマジですか」

「マジです。好きになってしまいました」

「……はあ。つか、何で2人で泣いてたんだよさつき」

「嬉し泣き？」

「よくわからない泣きだな」

「そう」

「じゃあ、そっちは嬉し泣きだったのかよ」

「さあ？」

「はあ」

彼が力を抜いて私の方にもたれかかってきた。

「ちょっと」

「何も考えられない」

「うん」

「なんだよそれ」

「ごめん。ほんとにごめんなさい」

「いいよ。わかったから」

そう言つと、やっと抱きしめ返してくれた。

「いつから？」

「よくわからない。好きな気持ちも何か良くわかんないし」

「なんだよそれは」

「だって、2人好きな状態になったりしたし」

「うん」

「男の人好きなの初めて出し」

「そっか」

「あのさ、ただ一緒に居たいのそれだけじゃだめ？」

「ダメじゃないよ。うん」

いつの間にか、気付くと周りが暗くなっていたので帰る事にした

…… どんだけ抱き合ってたんだか…… あはは。

まず公園から出ようと2人で手を繋いで歩いていたら、彼がぽつりと言った。

「俺たち凄く遠回りしてねえ」

そうかも知れない。でも、遠回りしたから、今、2人手を繋いでいられる気がした。

「だから、今があるんじゃない？」

「そっか。うん。かもな」

「ねえ」

「なに？」

「さっきの突然だったから、なんだか良くわからなかった」

「え！？ …… あゝ」

「もう一度してよ」

彼が笑つと私の頭を優しく撫でた。

安心する。自然と笑顔になってしまう。

そして、私はひとみをとじて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415/>

ひとみをとじて

2011年10月3日13時34分発行